

人の縁が染み込む聖堂

北鹿ハリストス正教会曲田福音聖堂・大館市曲田



【所在地】大館市曲田字曲田80-1
※見学は外観のみ。駐車スペースあり。

大館市から鹿角市方向に約10km、鉄道の駅でいえばJR花輪線大滝温泉駅の近くに、曲田という小集落がある。

この集落の中に、北鹿ハリストス正教会曲田福音聖堂はある。聖堂といっても、一般的な住宅の大きさにも満たないような、「可愛い」と表現してもいいくらいの木造の小さな聖堂だ。

建物の大小はともかく、秋田の山里に、どのような経緯でこんな聖堂ができたのだろうか。

日本のハリストス(キリストの意)正教会はロシア正教の流れを汲む。後に東京神田のニコライ堂に名を残すことになるロシア正教の神学生ニコライが、日本での伝道を志して今の函館ハリストス正教会に赴任したのが1861(文久元)年のこと。その函館時代のニコライに日本についての基礎知識を指南したのは、函館で医業を行う傍ら私塾を開いていた大館市出身の木村讓齋という人物であった。讓齋は後に大館に戻るようになるが、ニコライは讓齋との別れを惜しみ、一對のグラスとフォークを讓齋に贈ったという。ニコライにとって大館という地名はいつも心の隅に記憶されていたものだったのかもしれない。

そのニコライは1891(明治24)年

にニコライ堂(東京復活大聖堂)を建てることになるのだが、そのころ曲田には熱心な正教会信徒になっていた畠山之助という豪農がいて、上京してニコライ堂の威容に感銘を受け、いよいよ曲田にも聖堂をという思いを募らせたようだ。

市之助は、所有する山林から秋田杉を切り出し、ニコライ堂完成の翌年に曲田福音聖堂を完成させている。今となつては、ハリストス正教会の木造平屋建て教会としては日本最古の建築になるという。

小さな小さな古い聖堂には、さまざま縁が染み込んでいるようだ。

(文/己戸春策・イラスト/堀千里)